

ご挨拶

旭川赤十字病院 院長 牧野 憲一

旭川赤十字病院が旭川にて医療提供を行うようになり2023年で丁度100年の節目を迎えることとなります。1978年に救命救急センターを併設してからは、道北地区の救急医療の最後の砦としての役割を担ってきました。この役割は現在も継続しておりますが、旭川赤十字病院が地域から求められるものは時代とともに変化していると感じています。特に、2020年のcovid-19の襲来が引き起こした感染医療のニーズは嘗て経験したことのないものでした。個々の医療機関が単独で対応していたのでは対応しきれず、地域が協力して対応することが求められました。従来、感染症病床も持たず、感染症への対応能力のなかった旭川赤十字病院は多くのcovid-19患者を受け入れるべく設備改修を行い、全診療科の協力を得て対応することが出来ました。

これから旭川赤十字病院は新たな100年に飛び込んでいきます。新たな100年は今までとは異なっています。地域が変化しています。地域の医療を支える体制が変化しています。医療のみならず介護という100年前にはなかったカテゴリーとの連携も必要です。

このような環境の中で、旭川赤十字病院は救急医療を中心として、感染対応、老人医療、がん診療など地域が求める医療を提供していきます。しかも、最高水準の医療を。旭川赤十字病院は大学病院本院群と同等かそれ以上の医療水準であるとされるDPC特定病院群の病院です。さらに急性期医療に対する対応が極めて優れている病院のみが取得できる急性期充実体制加算も道北地域で唯一取得しています。今年からはダビンチによる手術も開始しました。脳血管疾患においては従来から高い水準にあった開頭術に加えて血管内治療の体制も充実させました。これからも最先端の高度急性期医療提供体制を整え、地域をリードする病院として道北地区の医療に貢献していきます。これからも旭川赤十字病院を宜しくお願い致します。

